

国  
 2021年度  
 語  
 (問題)

〈R 03152018〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～10ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
  - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、試験開始後、解答用紙の氏名欄に氏名を正確に丁寧に記入すること。
  - (2) マーク欄には、はっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと(砂消しゴムは使用しないこと)。

マークする時	● 良い	○ 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	○ 悪い	○ 悪い

- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 8 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 以下は明治時代の「読売新聞」の記事について論じたものである。これを読んで、あとの問いに答えよ。(なお、設問の都合上、文章の一部を改めている。)

たとえば、盲人向けの文字を工夫したという雑報(一八七五年七月八日)がある。これは、「教会社」という民間団体が、片仮名を浮き出す文字を工夫したという「東京日々新聞」(日報社)の記事を紹介した、五月二五日の記事を受けて書かれたものである。

サアいよいよ眼明きの人たちハ学文をいたさねバ成らぬ事が始まつた。無筆文盲の恥かしさハ齒をくひしめても始まらないから、間がな透がな読書をして、伶俐に成る事を考がへねバ成らなく成つて来た訳ハ、此間日報社の新ぶんに出て居た、教会社にて盲人に教へる本を拵らへる協談の事ハ、当社の新聞で御はなし申て置ましたが、夫につき、深川諸町の忍田といふ人ハ、盲人なれども此文字の事に心を用ひて、厚い紙にて<sup>㊦</sup><sup>㊧</sup><sup>㊨</sup>のやうな字を拵らへ、是を順に重ねて手紙などを拵らへ、譬へバ(タダイマ、ヨウガアルカラ、オイデ)といふやうに重ねて弟子へ送ると、弟子も其形を手さぐりにして、此用ハ何の訳だといふ事を知るといふ。そこで、此忍田といふ人が教会社の一件を聞いて大きに喜び、さてハ盲人も学文が出来るといつて居りました。眼明き先生、しつかりしてヤツて下さい。

近世社会では、盲人は、地域共同体の補助的な労働力や、当道座などの職能集団、芸能民などに組み込まれていた。しかし、明治政府による座の解体や遊民の取り締まりによって、障害者も血縁、地縁的な共同体を超えた社会関係を生きねばならなくなったのである。そこで、障害者もまた、女性や子供と同じように教育の対象として見出されていくことになった。盲人に対する文字教育は、京都盲啞院をはじめとして、一八七五年(明治八)七月には東京訓盲院の前身となる楽善会が組織されて、訓盲院設立の請願がなされるといふ状態にあった。この雑報は、そうした活動に接続する民間の動きを伝えていたといえる。

忍田という人物については、石川二三造『本朝盲人伝』(一九一九)に「忍田清宝は下総猿鳥郡山村の人忍田清兵衛の第二子なり。幼にして明を失い長ずるに及び、重富検校に従い鍼術を受け江戸深川に住む。清宝人と為り溫柔常に群盲を教育するを以て己が任と為す」と記載されている。彼が書いた、盲人用文字製造の官許を願った願上書も残されているが、この訓盲字が流布することはなかったようである。

この記事が問題となるのは、盲人が文字を所有することに関して、「**甲**」という、文字が読めない読者に対する教訓の文脈で語られている点にあった。それまで文字教育から疎外されてきた盲人が文字を読めるようになるということは、読者の「無筆文盲の恥かしさ」を照らし出す鏡の役割を果たしていたのである。

岐阜県の中学校で聾啞者に対する言語教育に成功した事例を報じた雑報(一八七五年五月一〇日)でも、「ほんに学校といふものハ有りがたいものでハありませんか」という教訓とともに語られている。あたかも学校は不可能を可能にする万能の施設であるかのようであった。読み書き能力の習得が、人間を改造して、価値を付与することであるかのよう<sup>a</sup>に読者に思わせる書き方がなされていたのである。それは、学校をキ避する人々の先入観を取り除くばかりではなかった。盲人や聾啞者の教育を新聞紙面に掲載することで、読者の競争心をあおるような文脈を作り出していたのである。その意味で、これらの雑報は決してニュートラルな報道を志向していたのではなく、差別的な視線を内在させていたといえる。

比較対象を差別的に取り上げること、文字が読めることの特権性をくすぐるような語りは、女性の文字習得を報じる記事の場合も例外ではなかった。たとえば、大小新聞を問わずに読んでいた「本所撞木ばし際の木下良三の娘おはる」が母と墓参に行っても、戒名で文字を学ぶとされる雑報(一八七五年五月一七日)では、「並の娘のやうに、寄せや芝居の事に浮身をやつすもの達とハ、挑燈と釣がねほど心だてが違ふ」と比較して、孝行娘を推シヨウしていたのである。

民衆に教訓する傍訓新聞の役割は、こうした比較の対象にされないように人々を教え導くことであった。これが、教育から疎外された人々を語る書き方になっていったといえる。

眼あきですら物の道理も知らずお先真ッ暗で、人間の仲間へ入れて置くのが惜いやうな者がいくらかも有る中に、茨城県士族の鈴木理八郎といふ人ハ、十七ケ年まへに両眼つぶれて、不自由ながらも手さぐりで田畑を耕作し、夜ハ素綱また藁細工が上手にて、其上草木のそだてかたをよく弁まへ、御布令ハ人の読のを聞いて居てそらで覚えており、農業の際にハ當時の世の中の事を、婦人や老人によく解るやうにはなして聞かせ、至ッて篤実で有るといふ。珍らしい人でハ有りませんか。

この雑報（一八七五年二月一〇日）も、無能な読者と対比する書き方を明らかに踏シユウしている。盲目になった彼は、仕事に精を出し、布告を暗唱し、世の中の事情にも通じていたのである。それは、文字も読めない連中が恥ずかしくなるような人物であった。自らの職業に励み、政府の意向も心得て、他人のためにもなる人間。この盲人士族は、障害を乗り越えて、そうした理想を体現していた。もともと読み書き能力があったらう士族の彼は、在所で農業に従事しながらも、地縁的な共同体を超えた「世の中」という社会関係を、布告を聞くことで内面化できたのである。この雑報は、そうした文字の効用もまた、メッセージとして発信していたといえる。

盲人だからといって、文字を習得しないで済ますことのできない社会の成立を、以上の記事から読み取れるであろう。加藤康昭氏の『日本盲人社会史研究』によれば、江戸時代には、本所一ツ目の惣録役所に設置された糾明所で、座中の規則に違反した盲人を収容して、文字を教えたという。それは、「日常生活に文字を必要としない一般の盲人にとって

は、文字学習は苦痛以外の何ものでもなかった」という懲罰の意味をもつからであった。ここで重要なのは、そうした懲罰としての文字習得ではなく、乙として文字の学習が必要になっている事態であった。あたかも、読み書きの能力を身につけることに例外がないことを示すかのように、傍訓新聞はこれまで文字教育から疎外されてきた人々の情報を、読者の鏡として掲載していたのである。法を犯した人間の場合も、その例外ではなかった。

横浜の懲役場に居る小林鉄五郎といふものハ、四ケ年まへに懲役になりましたが、元より無筆で、いろはのいの字も知らず、悪い事に巧で有りましたが、去年より読書を教へられるのでだんだん覚え、用の間にハ一心不乱に稽古をしたゆゑ、読書が出来、このせつでハ心も改ため、囚獄人の取締を申し付られるほどになつたからゐる男にて、此ほど一通の書面をしたため其筋へ出しましたが、人の一心といふものハ恐ろしいもので、僅のうちに立派にできる様になりました。其書面ハ明後日新聞に出します。

これは、一八七六年（明治九）七月二九日の雑報だが、その四ヶ月前の雑報（三月一三日）でも「島根県下の懲役人ハ読書を精出す」と、収監された囚人に施された文字教育のことが報じられている。「無筆」であったために犯した罪を、文字を覚えることで悔悟したこの囚人のように、文字教育が犯罪の防止にも寄与すると考えられていたのである。予告どおり、翌々日の紙面には、小林の「懲囚取締且内外工業場世話役」を辞す願書が掲載され、「是ほどに書る様になつたのハ（文の巧拙ハしばらくおき）有がたい事でハ有ませんか」と、囚人にも文字を授けるようになった施政が言祝がれている。

このように、開化期の『読売新聞』は、例外的な存在を許さない徹底さで文字教育を受容する人々の姿を報じ、識字の功用を啓蒙していたといえる。そればかりではなく、その紙面からは、それまでの身分や序列を転倒させるような事態も見出せるのだった。文字を読めることが人間的な価値と見なされるとき、生活世界の序列とは異なる価値規準として、読み書き能力が人間を測定する座標軸になったのである。

（山田俊治『大衆新聞がつくる明治の（日本）』による）

問一 傍線部 a・b・c のカタカナを漢字で表現したとき、同じ漢字をカタカナの部分に用いるものを、それぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

a キ|避

イ キ|特    □ キ|伏    ハ 禁|キ    ニ キ|薄    ホ キ|納

b 推|シヨウ

イ シヨウ業    □ シヨウ励    ハ シヨウ応    ニ シヨウ歌    ホ シヨウ出

c 踏|シユウ

イ シユウ態    □ 郷|シユウ    ハ シユウ逸    ニ 急|シユウ    ホ シユウ旋

問二 傍線部 1 「盲人向けの文字を工夫した」とあるが、その内容の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 文字を紙の上に浮き出させ、さわることで文字が分かるようにした。

□ 文字の線にそって穴をあけ、その穴の配置をさわることで文字が分かるようにした。

ハ 文字をそれぞれ異なる紙の形で示すことで、さわって文字が分かるようにした。

ニ 介助者が文字を読み上げ、それを聞き取ることによって文字が分かるようにした。

ホ 伝えたいことを人に紙に書いてもらい、それを渡して文字を伝えるようにした。

問三 傍線部 2 「教育の対象として見出されていく」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 教育に役立つ人材として、等しく教育をほどこされるようになること。

□ 性や年齢などによる差別や偏見が民衆からとりのぞかれていくこと。

ハ 障害をもつ人々を、健常者と同じ能力をもつと見なすようになること。

ニ 誰しもうが努力しだいで平等に力を發揮できるような社会となること。

ホ 社会にとって有用な人材として積極的に活用されていくこと。

問四 空欄甲には最初に引用された新聞記事の中の語句が用いられている。最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 眼明きの人たちハ学文をいたさねバ成らぬ事が始まつた

□ タダイマ、ヨウガアルカラ、オイデ

ハ 此用ハ何の訳だといふ事を知る

ニ 盲人も学文が出来る時が来た

ホ 眼明き先生、しツかりしてヤツて下さい

問五 傍線部3「差別的な視線を内在させていた」について説明したものと、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ これら雑報は、文字を読むことに対する人々の功利的な価値観を、障害者に押しつけようとしている。
- ロ これら雑報は、健常者の中にある障害者のイメージを変えていくことで、新たな価値を作り出している。
- ハ これら雑報は、文字を読めることに肯定的な価値を与えることで、差別や偏見を解消している。
- ニ これら雑報は、読者が共通している障害者のイメージを利用することによって成り立っている。
- ホ これら雑報は、障害者に否定的なイメージを割り振ることで読者へのメッセージを生み出している。

問六 傍線部4「対比」とあるが、本文の事例では何と何が対比されているのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「眼あき」と「人間の仲間へ入れて置くのが惜いやうな者」
- ロ 「人間の仲間へ入れて置くのが惜いやうな者」と「士族の鈴木理八郎」
- ハ 「士族の鈴木理八郎」と「婦人や老人」
- ニ 「婦人や老人」と「珍しい人」
- ホ 「珍しい人」と「眼あき」

問七 傍線部5「そうした文字の効用」とは何か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 文字が、布告を読む人の声を通して、広く人の教化に役立っていくこと。
- ロ 文字が、その習得によって困難を克服する強い意志を人の内面に生み出していくこと。
- ハ 文字が、人々の間に共通に使用されることで、平等な社会関係を作り出していくこと。
- ニ 文字が、それを用いる地域や共同体における共通の価値観を作り出していくこと。
- ホ 文字が、それを読める人と読めない人との間に競争心を生み出していくこと。

問八 空欄乙に入る語句として最も適切な語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 国家に帰属する一人
- ロ 更生した社会の一員
- ハ 学習する生徒の一人
- ニ 地縁的な共同体の一員
- ホ 犯罪を悔いる一人

問九 傍線部6「転倒」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 文字を学ぶということが、文字を学んだ人物の考え方や性質を変えてしまうこと。
- ロ 罪を犯した囚人が、文字を学ぶことを通じて逆に社会に役立つようになっていくこと。
- ハ 読み書きの能力を身につけることが、犯罪者の心に善意を根付かせるようになること。
- ニ 読み書きの能力の有無によって、人格や思想の善し悪しを推し量るようになること。
- ホ 社会の施策を通して、囚人が自らの意思で進んで文字を学ぼうとするようになること。

問十 本文の内容の説明として適切でないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 盲人の文字教育に関する記事には、しばしば健常者に対する教育的なメッセージが見られる。
- ロ 文字を習得することができるかどうかは、地縁や血縁の結びつきによって左右されてきた。
- ハ 読み書きの能力は、もともと関係のなかった多様な価値としだいに結びつけられるようになっていった。
- ニ 文字を学ぶという行為は、囚人が更生するうえでの有効な手段としてもとらえられていた。
- ホ 文字を学ぶということが、新聞記事の中で身分や階層を超えるような価値をおびるようになっていった。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。(なお、設問の都合上、文章の一部を改めている。)

『源氏物語』 雨夜の品定め  
の体験談のなかで、左馬頭が嫉妬深い女と浮気な女との体験を語り、頭中将がはかない女(後の夕顔)との体験を語った後に、若い藤式部丞が自分の師匠である博士の娘とかかわった体験を語る。

※この問題は、著作権の関係により掲載ができません。

※この問題は、著作権の関係により掲載できません。

(田中隆昭『交流する平安朝文学』による)

問十一 二重傍線部 a・b・c の語の活用形を次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。同じ選択肢を複数回選択してもよい。

イ 未然形    □ 連用形    ハ 終止形    ニ 連体形    ホ 已然形    ヘ 命令形

問十二 空欄 1・2 に入るものの組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 1 はばかりて    2 なつかしき  
□ 1 いとひて    2 こちたき  
ハ 1 あはれみで    2 つれなき  
ニ 1 わびて    2 つきつきしき  
ホ 1 たのみて    2 いとほしき

問十三 空欄 3 に入るものとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 学問    □ 民    ハ 道理    ニ 朝廷    ホ 天

問十四 空欄 4 に入るものとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 可愛い    □ つつしみのない    ハ 気の引ける    ニ 悔やまれる    ホ しゃくにさわる

問十五 空欄 5 に入るものとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 称赞    □ 非難    ハ 擲<sup>や</sup>揄<sup>ゆ</sup>    ニ 尊崇    ホ 嫉妬

問十六 傍線部①の貴公子たちの言葉を引用することで、筆者はこの物語は何を語っていると主張しているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 不気味な鬼を引き合いに出すことで、この物語は理想や規範とかけ離れた、特異な女の姿を描いている。  
□ 恐ろしい鬼を引き合いに出すことで、この物語は人間の心が環境によって優美な人間らしさを失ってしまうことを示している。  
ハ 醜い鬼を引き合いに出すことで、この物語は男性貴族の見た目だけに左右される価値観を否定している。  
ニ 空想上の鬼を引き合いに出すことで、この物語は賢女など今や世界のどこにも存在しないことを表現している。  
ホ 日本固有の鬼を引き合いに出すことで、この物語は中国とは違う、独自の賢女譚を目指している。

問十七 本文の空欄Xには次の漢詩が入る。この漢詩の空欄A・Bには一字の対義語が入る。その組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。(設問の都合上、送り仮名を省いた箇所がある。)

四座 且勿飲 聽我歌 兩途  
 富家女 嫁 嫁 早 輕 其夫  
 貧家女 嫁 嫁 晚 孝 於 姑  
 聞君欲娶 婦 娶 婦 意 何 如

- イ A 悪 B 善
- ロ A 貴 B 賤
- ハ A 寡 B 多
- ニ A 賢 B 愚
- ホ A 易 B 難

問十八 空欄Yには次の漢文が入る。これを読んで、あとの問いに答えよ。(設問の都合上、送り仮名を省いた箇所がある。)

勃海、鮑宣妻者、桓氏之女也。字少君。宣嘗就少君、  
 父学、父奇其清苦、故以女妻之、装送資賄甚盛。宣  
 不悦、謂妻曰、「少君生富驕、習美飾、而吾实貧賤、  
 不敢当礼」。妻曰、「大人以先生修德、守約、故使賤  
 妾侍執巾櫛。既奉承君子、唯命是從」。宣笑曰、「能  
 如是、是吾志也」。妻乃悉歸侍御服飾、更著短布  
 裳、与宣共挽鹿車、歸鄉里。拜姑礼畢、提甕出汲。  
 修一行 婦道、鄉邦称之。

注 ・勃海 地名。勃海郡。 ・装送 嫁入り道具。 ・資賄 財貨。 ・鹿車 小さな車。  
 ・修行婦道 妻として正しい道を守って踏み行う。 ・郷邦 郷里の人々。

(I) 傍線部A「不敢当礼」の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 貧乏な自分の境涯を憐れんので、自分のプライドがひどく傷つき、意地でも受け取るまいと  
 しよう。

ロ 師弟の関係であることを思えば、このような高価な贈り物は分不相応のため、恐れ多くて受け取れないと  
 しよう。

ハ 頂くことは構わないが、一生妻に頭が上がりなくなるので、将来のことを考えて、あえて受け取らないと  
 しよう。

ニ 娘可愛さといえ、度が過ぎてむしろ自分にとっては非礼にすら感じるので、是が非でも受け取らないと  
 しよう。

ホ 世間では嫁を娶る側が結納を贈るのが普通なのに、これでは正反対となり、恥ずかしくて受け取れないと  
 しよう。

(Ⅱ) 傍線部イ「使賤妾待執巾櫛」の「待執巾櫛」とは、「(夫の身なりを整えるために)手ぬぐいとくしを手にとる」の意味で、転じて「夫婦になる」ことを表す。この文の返り点の付け方として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 使<sub>レ</sub>賤<sub>レ</sub>妾<sub>レ</sub>待<sub>コ</sub>執<sub>コ</sub>巾<sub>櫛</sub>
- ロ 使<sub>レ</sub>賤<sub>レ</sub>妾<sub>レ</sub>待<sub>コ</sub>執<sub>コ</sub>巾<sub>櫛</sub>
- ハ 使<sub>レ</sub>賤<sub>レ</sub>妾<sub>レ</sub>待<sub>コ</sub>執<sub>コ</sub>巾<sub>櫛</sub>
- ニ 使<sub>コ</sub>賤<sub>コ</sub>妾<sub>コ</sub>待<sub>コ</sub>執<sub>コ</sub>巾<sub>櫛</sub>
- ホ 使<sub>コ</sub>賤<sub>コ</sub>妾<sub>コ</sub>待<sub>コ</sub>執<sub>コ</sub>巾<sub>櫛</sub>

(Ⅲ) 傍線部ウ「妻乃悉婦侍御服飾、更著短布裳、与宣共挽鹿車帰郷里」の説明として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 少君はすぐさま従者を呼んで準備を始め、それまで身につけていた平民の服を着替え、鮑宣と落ち合い、嫁入り道具を満載にした車を二人で引きながら夫の郷里に帰った。
- ロ 少君はさんざん迷った挙げ句、父から贈られた金品を一度すべて返したかに見せかけ、一部をそつとボロきれの中に入れ、鮑宣とともに小さな車に乗り夫の郷里に帰った。
- ハ 少君は賢明にも従者に嫁入り道具を全て渡し、それをボロの布でおおって見えなくして運ばせ、鮑宣と二人は小さな車を引いて質素な嫁入りを演出しつつ夫の郷里に帰った。
- ニ 少君はなんと父から贈られた高価な贈り物や従者をすべて送り返して、上等の衣服を脱ぎ、平民の質素な服装に着替え、鮑宣と一緒に小さな車を引っ張って夫の郷里に帰った。
- ホ 少君はさすがに父の心遣いを無にできないと考えたが、夫の命に従うのが妻の務めと夫の用意した平民の服に着替え、小さな車を引いて質素な嫁入りを装って夫の郷里に帰った。

〔以下余白〕